

輸入住宅における公室構成からみた住まい方の傾向

竹田 喜美子 番場 美恵子*

A trend of living activities viewed from public room composition of Imported Houses

Kimiko TAKEDA Mieko BAMBA

The purpose of this paper is to investigate and clarify the trend of living activities in the public rooms in the plan type of LDK+F (“L”, “D”, “K” and “F” are living room, dining room, kitchen room and family room for short respectively), through the ratio of the area of each public room, the coupling pattern with public rooms and the location of room in the house.

Following results are obtained: (1) The space of F gives an influence to living activities greatly. (2) The living activities of D change by the coupling pattern with D and other public rooms. The location of D in the house affects living activities. (3) How the three public rooms to be utilized most efficiently in the plan type of LDK+F is when the area of them in total is under than sixty square meters, when the area of F is more than ten square meters, when the each area of three public rooms is almost equal, when L and F is semi-separated each other, and when L and D are located rather at south-side.

Key word; Imported Houses, Public room composition, Ratio of area, Coupling pattern, Location of public room
輸入住宅 公室構成 面積配分 連結形式 位置関係

1. はじめに

(1) 研究目的

本研究は、平面構成が「全室洋室」, 「公室3室(リビングルーム(L)とダイニングルーム(D)以外に、ファミリールーム(F)を含む)」および「面積が概ね広大(居住面積が130㎡以上)」の3条件を満たす輸入住宅を対象に^{注1)}, 公室における住まい方の傾向を公室構成の3要素(後述)から分析し、洋室3室である「LDK+F」プランの有効性について考察し、今後

の公室空間の計画に何らかの示唆を得ることを目的とする。

近年の国産住宅の動向をみると、住宅規模の拡大や洋室化の進行があげられる。新設戸建住宅の床面積は、1990年が129.7㎡, 1995年が129.9㎡, 1999年が131.5㎡と経年的に増加している^{注2)}。また都市における戸建住宅の平均的プランは、1980年代には1階にLDKと和室1室, 2階に洋室2室と和室1室の型であったが^{注3)}, 1990年代には1階にLDKと和室1室,

*昭和女子大学生活科学部生活環境学科助手 (Assistant, Dept. Environmental Design, Faculty of Living Science, Showa Women's Univ.)

2階に洋室3室の型になり、洋室が増大する傾向にあることがわかる^{注4)}。この国産住宅の動向は、本研究が対象とする輸入住宅の特徴と符合する。公室に限定してみると、現在はLDK+和室のタイプが大勢を占めているが、今後さらに洋室化が進行すれば、選択肢のひとつである洋室3室の公室(LDK+Fのプラン)について検討する必要がある。輸入住宅における住まい方を把握することは、今後の都市における国産住宅の方向を探る手掛かりになると考えられる。

(2) 研究方法

住宅規模の拡大に伴い公室面積が増大し、公室構成が多様化している。公室構成は、公室各室の大きさを示す面積配分、つながりを示す連結形式、および方位を示す位置関係などの要素によって成立している。

公室構成と住まい方の関係を明らかにするために、①公室の面積配分により住まい方に差異が生じるのか、②L、D、Fの3室の連結形式により住まい方が変化するのか、③L、D、Fのうち南面する室の位置関係により住まい方が異なるのかをみる。なお本研究では、住まい方の相違を確認するために χ^2 検定を行う。住み方調査は、量的傾向より質的差異の把握に重点

を置くという主旨から、統計的な傾向のほかに、具体的な事例もあげながら分析する。

住まい方は、公室空間で行われる生活行為を「接客」「だんらん」「食事」「家事」「子ども遊び」「趣味」「更衣」の7分類とし、さらに実態を把握するために細分類した計27行為項目(表1)を公室のどの室で行っているか、および7つの生活行為の拠点は公室のどの室であるかについて、アンケートならびにヒアリングで得た回答をもとに判断している。そして、公室3室で行われる行為項目数から行為の量を把握し、公室3室で行われる生活行為の内容や生活行為の拠点などから3室の空間的性格を分析する。だんらんや趣味も行われるが接客を中心に使用される空間を「接客的空間」、親しい接客をはじめとして家事やその他雑多な行為が行われるがだんらんや食事を中心に使用される空間を「家族的空間」とする。家事中心、あるいは遊び中心、または趣味中心に使用される空間を「個人的共有空間」(全くの私室ではないという意味)とする。なお、公室3室が有効に活用され、<開かずの間>がなく、一室一室が自立した性格を有し、完全な私室(個人専用の空間)を持たない場合を住みこなしているとみなす。

表1 公室空間で行われる生活行為

	公							私																	
生活領域	接客生活		家族生活			家事			個人生活																
生活行為	接客生活		だんらん		食事	家事			遊び		趣味	更衣													
行為項目	客応対	客食事	客宿泊	テレビ	スゴレオ	ゲム	読書	書き物	家事食事	飲酒	アイロンかけ	洗濯物たたみ	繕い物	ミシンかけ	編み物	子ども宿題	子ども遊び	子ども楽器	世帯主趣味	主婦趣味	世帯主仕事	主婦仕事	着替	脱衣	化粧(昼寝)

(3) 調査概要

調査対象は、4箇所(箇所)の輸入住宅村にある輸入住宅のうち、公室がL、D、F、Kで構成されており、かつ詳細な訪問調査を実施した52戸

である。内訳は、西神SVビレッジ(兵庫県神戸市)15戸、フラワータウン・アメリカ村(兵庫県三田市)10戸、ワシントン村(兵庫県三田市)22戸、アメリカンヒルズ(兵庫県神戸市)

5戸である。これらの住戸の公室は、全室洋室（キッチン（K）を除き3室）である。調査時期は1990～94年の8月または9月である。調査内容は、主婦を中心とした住まい方に関するアンケートおよびヒアリング^{注5)}、平面図および家具配置採集、写真撮影である。

居住者の属性（表2）は、家族人数は4人が中心で、核家族が大半を占める。世帯主の年齢は働き盛りの40代が40%を超え、長子年齢は乳幼児と中高生が同率で高い。なお、居住者はすべて定住者で、居住年数は1～3年である。海外居住経験者は1割程度である。

住宅特性（表2）をみると、居住面積は111.0～222.0㎡で平均は168.2㎡である。プランタイプは3LDK+Fが中心で、公室全体の面積は平均59.5㎡である。日本の戸建住宅において、公室面積の誘導的基準は50㎡以上とされているので、調査対象の輸入住宅は、その基準を十分満たしているといえる。

さらに、公室各室の平均をみると、L面積は20.7㎡（12.5帖）、D面積は13.6㎡（8.2帖）、およびF面積は12.6㎡（7.6帖）である。K面積は平均12.6㎡（7.6帖）である。L面積がやや大きく、D、F、K面積はほぼ同じである。ちなみに、国産住宅の場合、平均で床面積は127.8㎡、公室面積（1階和室を含む）は46.7㎡、L面積は18.5㎡（11.2帖）、D面積は10.5㎡（6.4帖）、和室面積は12.6㎡（7.6帖）、K面積は8.6㎡（5.2帖）である。

2. 公室の面積配分と住まい方の関係

まず、始めに、公室の住まい方を概括する。3室の生活行為の量的配分（図1）は、Lが30%、Dが25%、Fが45%で、Fでの行為量が最も多い。ちなみに、一戸当たりの平均項目数は、Lが6.5、Dが5.1、Fが9.7で、3室では21.3である。

また、3室の使われ方から空間的性格（表3）

表2 居住者属性および住宅特性

居住者属性						
家族形態 (戸)	1世代	2世代	3世代			
	9 (17.3%)	37 (71.2%)	6 (11.5%)			
家族人数 (戸)	2人	3人	4人	5人	6人	
	10 (19.2%)	11 (21.2%)	23 (44.2%)	7 (13.5%)	1 (1.9%)	
世帯主年齢 (戸)	20代	30代	40代	50代	60代	
	2 (3.8%)	13 (25.0%)	21 (40.4%)	10 (19.2%)	6 (11.5%)	
長子年齢 (戸)	夫婦のみ	乳幼児	小学生	中高生	大学生 or 有職者	
	11 (21.2%)	12 (23.1%)	8 (15.4%)	12 (23.1%)	9 (17.3%)	
世帯主職業 (戸)	自営業	会社員	経営・管理	専門職	無職	不明
	10 (19.2%)	23 (44.2%)	9 (17.3%)	6 (11.5%)	3 (5.8%)	1 (1.9%)
住宅特性						
面積 (m ²)	居住面積	公室面積計	L	D	F	K
最小	111.0	44.0	10.4	5.9	5.0	5.0
最大	220.0	78.3	30.1	19.9	23.4	17.6
平均	168.2	59.5	20.7	13.6	12.6	12.6

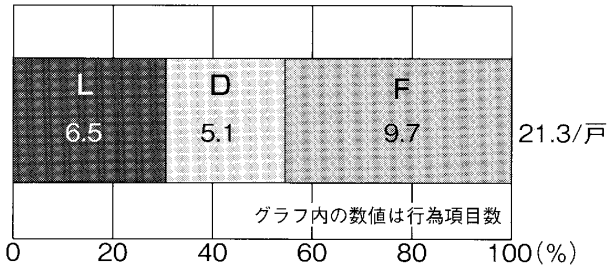


図1 公室3室の生活行為割合および項目数

表3 公室3室の使われ方

	計	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
計	156	43	87	22	4
		27.6	55.8	14.1	2.6
L	52	26	23	3	0
		50.0	44.2	5.8	0.0
D	52	17	19	12	4
		32.7	36.5	23.1	7.7
F	52	0	45	7	0
		0.0	86.5	13.5	0.0

(上段：室数 下段：%)

をみると、Lは接客的空間がやや多く、家族的空間が続く。Dは家族的空間、接客的空間に個人的共有空間が続き、おおよそ同率である。また、私室が存在するのもDの特徴である。Fは殆どが家族的空間で、個人的共有空間が15%弱を示す。

つぎに、公室の面積により住まい方がどのように異なるかをみる。

(1) 公室各室の面積からみた住まい方

ここでは、L、D、F各室において面積別の住まい方の傾向をみていく。

① リビングルーム

L面積は、最小10.4㎡(6.3帖)、最大30.1㎡(18.2帖)で平均20.7㎡(12.5帖)である。L面積を、10帖(16.5㎡)以下(13戸)、10帖を超え12帖(19.8㎡)以下(9戸)、12帖を超え15帖(24.8㎡)以下(18戸)、15帖を超える(12戸)の4つに分け、面積別にLの住

表4 L面積別公室3室の使われ方

L					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
10帖以下	13	8	3	2	0
12帖以下	9	6	2	1	0
15帖以下	18	8	10	0	0
15帖超	12	4	8	0	0

χ^2 p=0.1217

D					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
10帖以下	13	5	4	4	0
12帖以下	9	4	3	2	0
15帖以下	18	4	7	4	3
15帖超	12	4	5	2	1

χ^2 p=0.7874

F					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
10帖以下	13	0	13	0	0
12帖以下	9	0	9	0	0
15帖以下	18	0	13	5	0
15帖超	12	0	10	2	0

χ^2 p=0.0823

まい方をみる(表4)。L面積が12帖を超えると、接客をはじめ家族も頻繁に使用する、いわば使用頻度や使用用途の多い家族的空間になる住戸が半数を超える。逆に12帖以下であると、どちらかという接客中心の接客的空間など、比較的使用用途が少なくなる住戸が目立つ。L面積に関しては、およそ12帖を境に住まい方の差が表れるといえる。

② ダイニングルーム

D面積は、最小5.9㎡(3.6帖)、最大19.9㎡(12.1帖)で平均13.6㎡(8.2帖)である。D面積を、6帖(9.9㎡)以下(8戸)、6帖を超え8帖(13.2㎡)以下(17戸)、8帖を超え10帖(16.5㎡)以下(16戸)、10帖を超える(11戸)の4つに分け、それぞれのDの住まい方をみる(表5)。住戸により使用頻度の高い家族的空間になったり、接

表5 D面積別公室3室の使われ方

L					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
6帖以下	8	6	2	0	0
8帖以下	17	9	6	2	0
10帖以下	16	6	10	0	0
10帖超	11	5	5	1	0

χ^2 p=0.3782

D					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
6帖以下	8	3	2	2	1
8帖以下	17	5	6	4	2
10帖以下	16	4	8	4	0
10帖超	11	5	3	2	1

χ^2 p=0.8891

F					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
6帖以下	8	0	8	0	0
8帖以下	17	0	15	2	0
10帖以下	16	0	11	5	0
10帖超	11	0	11	0	0

χ^2 p=0.0617

客的空間だったり、子どもの遊び場や家事室といった個人的共有空間となるなど、さまざまなパターンがみられる。面積別にはとくに偏りはなく、Dの住まい方はDの面積には関係しない。

③ ファミリールーム

F面積は、最小5.0㎡(3.0帖)、最大23.4㎡(14.2帖)で平均12.6㎡(7.6帖)である。F面積を、6帖(9.9㎡)以下(15戸)、6帖を超え8帖(13.2㎡)以下(16戸)、8帖を超え10帖(16.5㎡)以下(14戸)、10帖を超える(7戸)の4つに分け、それぞれにおいてFの住まい方に差異が表れるかをみる(図2、表6)。F面積が6帖以下のとき、個人的共有空間になる割合が4割と高くなるが、6帖を超えると、ほぼ100%家族的空間になるといってよい。つまり、F面積は6帖を境に住まい方に差異がみられる。

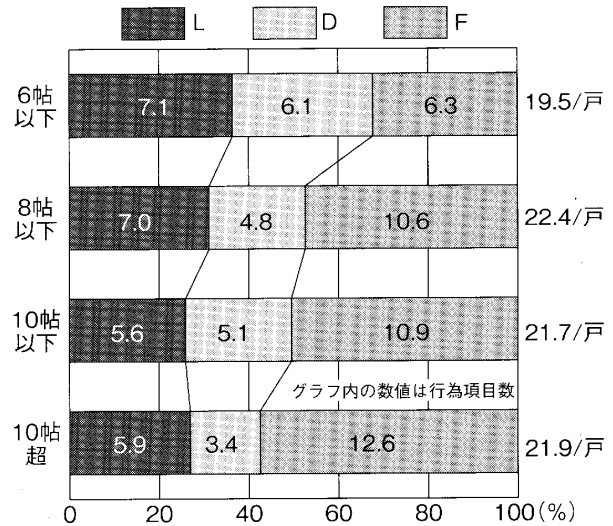


図2 F面積別公室3室の生活行為割合および項目数

表6 F面積別公室3室の使われ方

L					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
6帖以下	15	4	11	0	0
8帖以下	16	10	5	1	0
10帖以下	14	7	5	2	0
10帖超	7	5	2	0	0

χ^2 p=0.1284

D					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
6帖以下	15	3	10	1	1
8帖以下	16	5	4	4	3
10帖以下	14	4	5	5	0
10帖超	7	5	0	2	0

χ^2 p=0.0361

F					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
6帖以下	15	0	9	6	0
8帖以下	16	0	15	1	0
10帖以下	14	0	14	0	0
10帖超	7	0	7	0	0

χ^2 p=0.0045

そのほかに、Kの面積が大きいことが輸入住宅の特徴として挙げられるので、Kについてふれる。

④ キッチン

K面積は、最小5.0㎡(3.0帖)、最大17.6㎡(10.7帖)で平均は12.6㎡(7.6帖)である。Kは国産住宅と比べると大きく、8帖を超えるとカウンターや中央調理台、造り付けの食器戸棚や食品庫などの収納スペースが設置されている。これらには、食料品のほかに日常の雑貨から普段あまり使わないものまで、あらゆるものが収納されている。ものが表に出ないので、外見がよく、公室がすっきりしてみえる。

(2) LDとFKの面積比率からみた住まい方

輸入住宅の公室空間は、LとD、FとKがそれぞれ隣接しており^{注6)}、LDとFKの2つの領域に分割することができる。ところで、LD面積は23.0～47.2㎡で、平均は34.3㎡、FK面積は16.1～36.8㎡で、平均は25.2㎡である。LDとFKの面積比率は、LDを1とするとFKは0.52～1.37で、平均はおおよそ0.75である。一方、アメリカの戸建住宅の場合は、LDとFKの面積比率の平均はFKが0.9LDである^{注7)}。そこで、LDに対してFKが小さいものとしてFK<0.7LD(19戸)、平均的なものとして0.7LD≤FK<0.9LD(21戸)、大きいものとしてFK≥0.9LD(12戸)の3つに分類する。ちなみにFKの面積がLDより大きい住戸は5戸と少なく、ほとんどがLDより小さい。ところでLDとFKの面積比率はF面積と概ね比例する(相関係数=0.8016)。つまり、面積比率が低いとF面積は小さく、面積比率が高いとF面積は大きい。LDとFKの面積比率の3タイプごとに住まい方の特徴をみる(図3、表7)。

① FKが小さいタイプ(FK<0.7LD)の住まい方

公室各室の生活行為の割合をみると、3室が

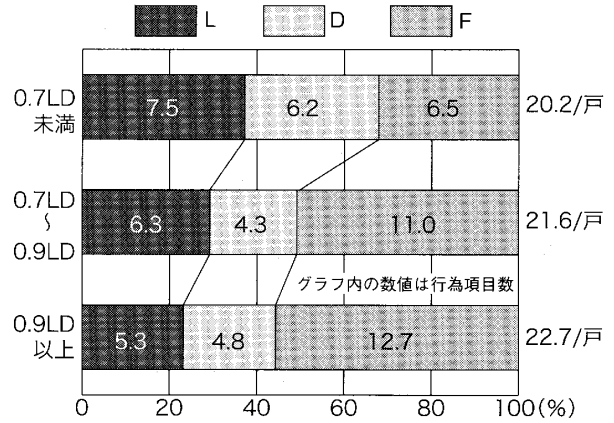
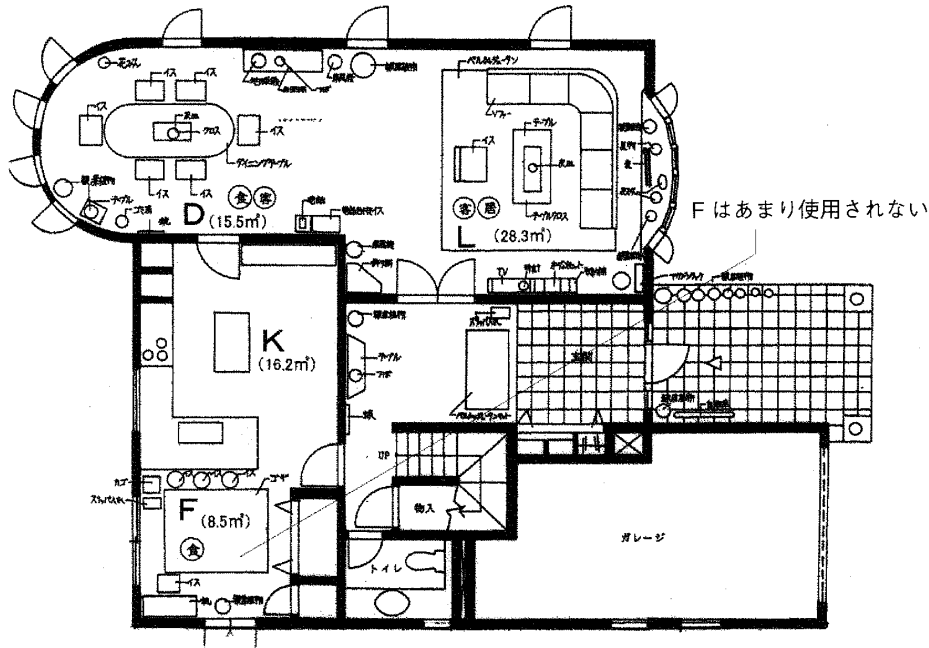


図3 面積比率別公室3室の生活行為割合および項目数

表7 面積比率別公室3室の使われ方

L					
LDに対するFKの割合	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
0.7	19	6	13	0	0
0.7～0.9	21	12	8	1	0
0.9	12	8	2	2	0
χ^2					p=0.0324
D					
LDに対するFKの割合	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
0.7	19	3	12	2	2
0.7～0.9	21	8	4	7	2
0.9	12	6	3	3	0
χ^2					p=0.0553
F					
LDに対するFKの割合	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
0.7	19	0	12	7	0
0.7～0.9	21	0	21	0	0
0.9	12	0	12	0	0
χ^2					p=0.0009

ほぼ同程度に使用されていることがわかる。F面積が狭いために、LDが生活の中心になっており、とくにDの項目数が他のタイプと比べ高いのが特徴である。このタイプでは、LやDはともに家族的空間(Lはだんらんが主で、Dは食事が主)になり、Fは家事室などの個人的共有空間になりやすい。



家族構成は世帯主(46歳)会社経営, 長女(21歳)会社員, 次女(19歳)大学生

図4 Y宅の住まい方事例(FKが小さいタイプ)

事例を示す(図4)。Y宅ではFの面積が8.5㎡とかなり小さい。Fでは軽い食事をしたり、洗濯物たたみなどの家事をする。主な食事はDでとるため、Fが使われることは少ない。

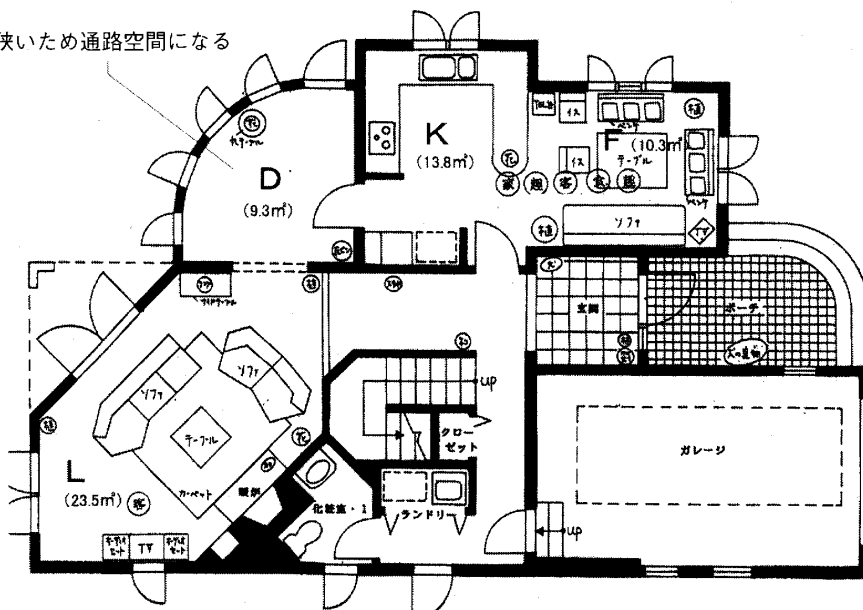
②FKが平均的なタイプ(0.7LD ≤ FK < 0.9LD)の住まい方

公室各室の生活行為の割合をみると、Fが5

割と高く、次いでL、Dと続く。Dの項目数が他のタイプに比べ低い。このタイプでは、Lは接客的空間に、Fは家族的空間になり、LとFの間に位置するDは通過空間になりやすい。このような住まい方になるのは、Dの面積が比較的小さい住戸に多い。

事例を示す(図5)。Y宅ではDの面積が9.3

Dは狭いため通路空間になる



家族構成は世帯主(39歳)会社経営, 妻(39歳)会社員, 長女(7歳)小学生

図5 Y宅の住まい方事例(FKが平均的なタイプ)

m²と小さい。Dには家具を何も置かず、ただ大きな花瓶が飾ってあるだけで、ギャラリーのような空間になっている。Lの面積が23.5 m²と平均よりやや広く、ゆとりの空間になっているため、LDを通して一体感がある。Dだけをみると、生活行為が行われな単なる通過空間である。

③ FKが大きいタイプ (FK ≥ 0.9 LD) の住まい方

公室各室の生活行為の割合をみると、Fの割合が55%を占め、Lが25%である。項目数としてFが多く、Lが少ないが目立つ。このタイプは、Fの面積が大きいため、Fが生活の中心になり使用頻度が3タイプの中でもっとも高い。Fは家族的空間で、LとDは両室とも接客的空間 (Lは客の応対が主で、Dは客の食事が主) になりやすい。

事例を示す (図6)。T宅では、Fの面積が22.4 m²とかなり大きい。Fは生活の中心の場として、生活行為のほとんどが行われている。LやDでもたまに食事やだんらんが行われるが、Fでの和やかな雰囲気とは対照的に、改まった感じがする。LやDは接客的空間として使われ、Fとは意識的に使い方を区別している。

要するに、FK面積の比率が大きくなるにつれ、Lは家族的空間から接客的空間になる傾向がある。DもLとほぼ同じ傾向がみられる。DはFKが小さいと家族的空間になりやすく、大きくなるにつれ個人的共有空間や接客的空間の割合が増える。Fは殆どの場合家族的空間であるが、FKが0.7 LD未満のとき、個人的共有空間になる傾向が強い。

(3) 公室面積からみた住まい方

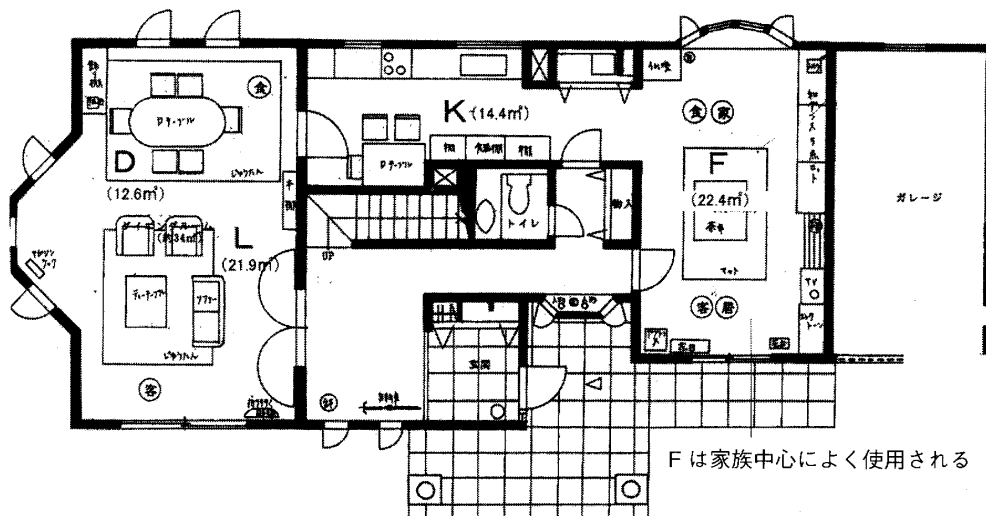
ここでは、公室面積により住まい方に影響がでてくるのかをみていく。公室の合計面積は最小44.0 m²、最大78.3 m²で平均59.5 m²である。そこで、公室面積を50 m²未満 (8戸)、50～60 m² (28戸)、60 m²以上 (16戸) に分類して、住まい方の違いを探る (図7、表8)。

① 公室面積が50 m²未満の住まい方

公室各室の生活行為の割合をみると、Lが3割強、Dが2割弱、Fが5割弱で、Fの項目数が高い。Lが接客的空間に、DとFがともに家族的空間になりやすく、50 m²未満の広さでは、個人的共有空間や私室の確保は殆どみられない。

② 公室面積が50 m²以上60 m²未満の住まい方

公室各室の生活行為の割合は、Lが30%、Dが25%で、Fが45%である。Lが接客的空間、



家族構成は世帯主(53歳)自営業、妻(48歳)、長男(21歳)大学生、長女(19歳)大学生、祖父(80歳)

図6 T宅の住まい方事例 (FKが大きいタイプ)

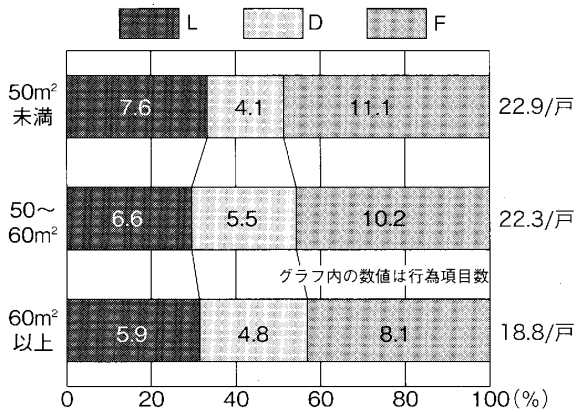


図7 公室面積別公室3室の生活行為割合および項目数

Dが個人的共有空間，Fが家族的空間のパターンと，LとDがともに家族的空間，Fが個人的共有空間のパターンがみられ，いずれにしても一室が個人的共有空間になりやすい。50 m²以上の広さになると，住まい方にバリエーションがみられる。

③ 公室面積が 60 m²以上の住まい方

公室各室の生活行為の割合は，ほぼ②のタイ

表8 公室面積別公室3室の使われ方

L					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
50 m ² 未満	8	6	2	0	0
50~60 m ²	28	13	12	3	0
60 m ² 以上	16	7	9	0	0

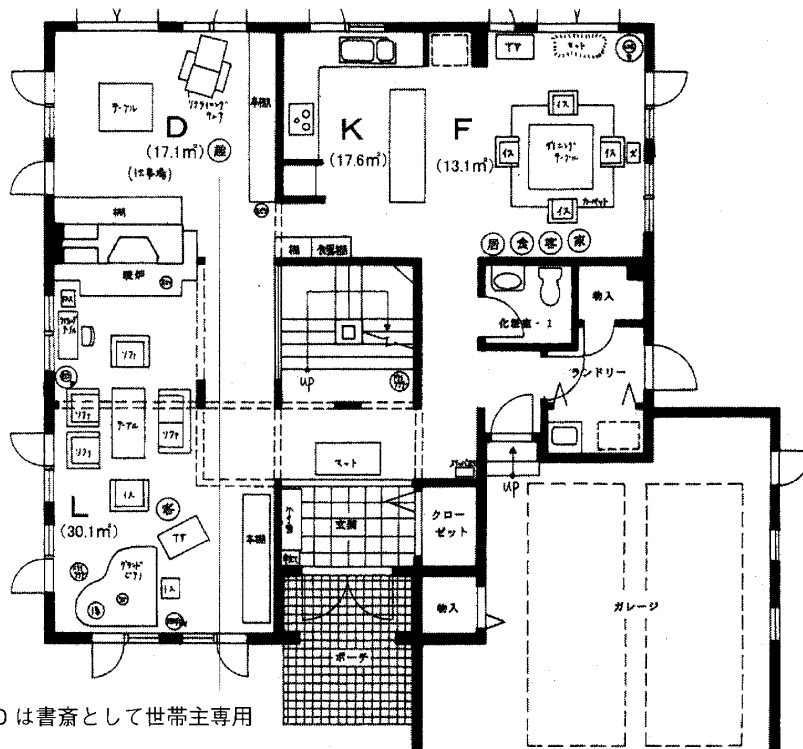
χ^2 p=0.2903

D					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
50 m ² 未満	8	1	5	2	0
50~60 m ²	28	8	11	6	3
60 m ² 以上	16	7	4	4	1

χ^2 p=0.5683

F					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
50 m ² 未満	8	0	8	0	0
50~60 m ²	28	0	22	6	0
60 m ² 以上	16	0	15	1	0

χ^2 p=0.1751



Dは書斎として世帯主専用

家族構成は世帯主(60歳)大学教授，妻(56歳)

図8 M宅の住まい方事例 (公室面積の大きいタイプ)

プと同様であるが、1戸当たりの公室3室での行為項目数は少ない。LとDが接客的空間に、Fが家族的空間に、あるいはLが家族的空間、Dが接客的空間か個人的共有空間、Fが家族的空間になりやすい。60㎡以上の広さになると、ゆとりがあるのかDが接客的空間になる割合が高い。

公室面積は50㎡を境に住まい方が変化するが、60㎡を超えてLやFが極端に大きいと（例えばLでは30㎡前後、Fでは20㎡を超える）生活行為がその室に偏り、他方使用頻度の低い室が出現する。さらに70㎡を超えると、家族人数が多い、来客が頻繁にある、という条件がないと住みこなしが困難になる。例えば夫婦2人のM宅では（図8）、公室面積が75㎡以上と広く、Dが世帯主の書斎で完全な私室となり、公室全体の統一性がなくなる。

以上から、公室面積は単に拡大すればよいのではなく、面積配分が住まい方を大きく左右することがわかる。そのなかで、F面積の大きさにより、住まい方に差異が表れる傾向にある。F面積が6帖以上であると、Fが家族的空間になるため、LやDは、接客的空間になる可能性が高く、F面積が6帖以下の場合、家族的空間が必然的にLやDに移動する。いずれにしろ、F面積が6帖を境に変化し、F面積が公室の住まい方全体に影響を与えると見える。

3. 公室の連結形式と住まい方の関係

連結形式とは、隣接する公室のつながり方を表わしたもので、以下に示す3つのつながり方をもとに、公室空間の連結形式のタイプ分けをする。

隣接する室と室が90cm以下の開口、またはドアや引戸などで連結する場合を「分界」（L/Dと表わす）、90cmを超える開口で連結する場合を「分節」（L・Dと表わす）、隣接する室

と室が全面開放により一体になって連結する場合を「一体」（LDと表わす）という。このつながり方をもとに、連結形式のタイプごとに住まい方の特徴をみていく。

(1) 連結形式のタイプ分け

3つの公室の連結形式は、以下の5つのタイプに分類できる。

- ①「LDF」で連結 LとDとFの3室が一体になっているが、Kは分界しているタイプ
 - ②「LD/F」で連結 LとD、またFとKが一体になっており、LDとFKが分界しているタイプ
 - ③「L・D/F」で連結 LとDが分節しており、FKが一体になっている。なおかつLDとFKが分界しているタイプ
 - ④「L/D/F」で連結 DとFは一体であるが、Lとは分界しているタイプ
 - ⑤「L/D/F」で連結 FとKが一体になっていて、LとDとFKが分界しているタイプ
- それぞれの戸数は、①が2戸、②が20戸、③が23戸、④が2戸、⑤が5戸である。つまり、輸入住宅では「L・D/F」と「LD/F」の連結が代表的なタイプであるといえる。

(2) 連結形式からみた住まい方

前述した連結形式の5タイプごとに住まい方の特徴をみる（図9、表9）。

①「LDF」の住まい方

公室各室の生活行為の割合をみると、Lが6割弱、Dが1割弱、Fが3割強で、他のタイプに比べ、Lの項目数が15.5と高く、反対にDが極端に低い。公室全体での1戸当たりの項目数は最も多い。LDFが一室になっていると、生活行為がLに集中し、なおかつ公室全体の行為量も高くなるといえる。Lは家族的空間、Dは個人的共有空間、Fは家族的空間となっている。3室が一体化しているので、接客的空間になりにくい。

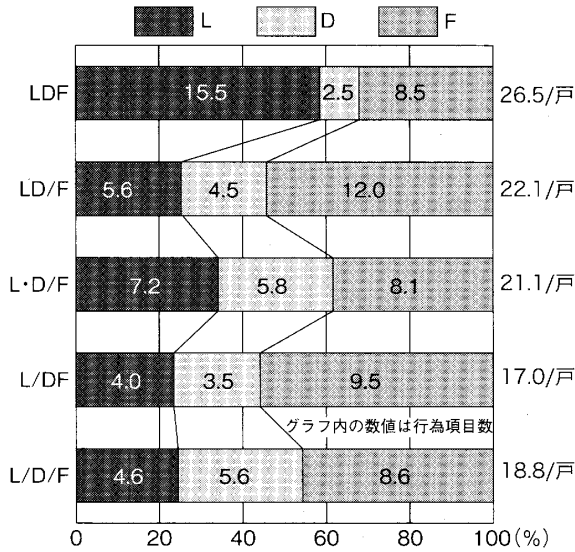


図9 連結形式別公室3室の生活行為割合および項目数

表9 連結形式別公室3室の使われ方

L					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
LDF	2	0	2	0	0
LD/F	20	13	5	2	0
L・D/F	23	9	13	1	0
L/DF	2	1	1	0	0
L/D/F	5	3	2	0	0
χ^2 p=0.4670					
D					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
LDF	2	0	0	2	0
LD/F	20	12	5	3	0
L・D/F	23	4	11	7	1
L/DF	2	0	2	0	0
L/D/F	5	1	1	0	3
χ^2 p=0.0000					
F					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
LDF	2	0	2	0	0
LD/F	20	0	19	1	0
L・D/F	23	0	17	6	0
L/DF	2	0	2	0	0
L/D/F	5	0	5	0	0
χ^2 p=0.2165					

② 「LD/F」の住まい方

各室の生活行為の割合をみると、Fが約55%と大半を占め、しかもFの項目数が12.0と他のタイプの中で最も多い。またこのタイプでは、LとDが接客的空間、Fが家族的空間となる傾向が強い。LDが一体化しているため、Dで行われる生活行為はLと連続するケースが多い。しかもLDを接客の場としているため、必然的にFでの行為量が多くなる。

事例を示す(図10)。O宅では、LDを1室としてとらえ、中央にLセットを置き、接客のための空間としている。その他の生活行為はすべてFで行われるため、Fの使用頻度がかなり高く、家族的空間として活用されている。

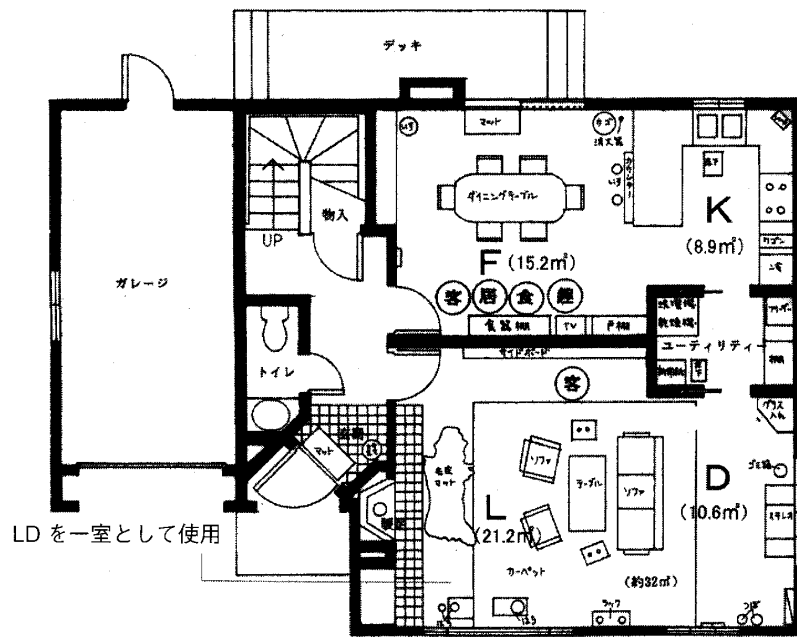
③ 「L・D/F」の住まい方

公室各室の生活行為の割合は、他のタイプに比べ3室とも均等に使用されていることがわかる。DがLと一体化していないため、Dで行われる生活行為はLと連動するとは限らず、Fで行われる行為がDにおいても行われることがある。そのためDが他のタイプと比較して、よく使用されることになる。つまり、行為量はFが平均よりも低く、LとDが若干高いことがいえる。Lが接客的空間、Dが個人的共有空間、Fが家族的空間になったり、LとDが家族的空間、Fが個人的共有空間のパターンがよくみられる。このタイプは一室が個人的共有空間になりやすいのが特徴である。

事例を示す(図11)。S宅では、LとDは接客も行うがだんらんや食事を行う家族的空間である。だんらんや食事は、そのときの気分や状況に応じてFであったり、LやDであったりする。このように自由に室を選択することによって、各室とも満遍なく使われ、住まい方にも変化を持たせることができる。

④ 「L/DF」の住まい方

公室各室の生活行為の割合をみると、Fが



家族構成は世帯主(57歳)会社員(管理職), 妻(56歳), 長女(24歳)会社員

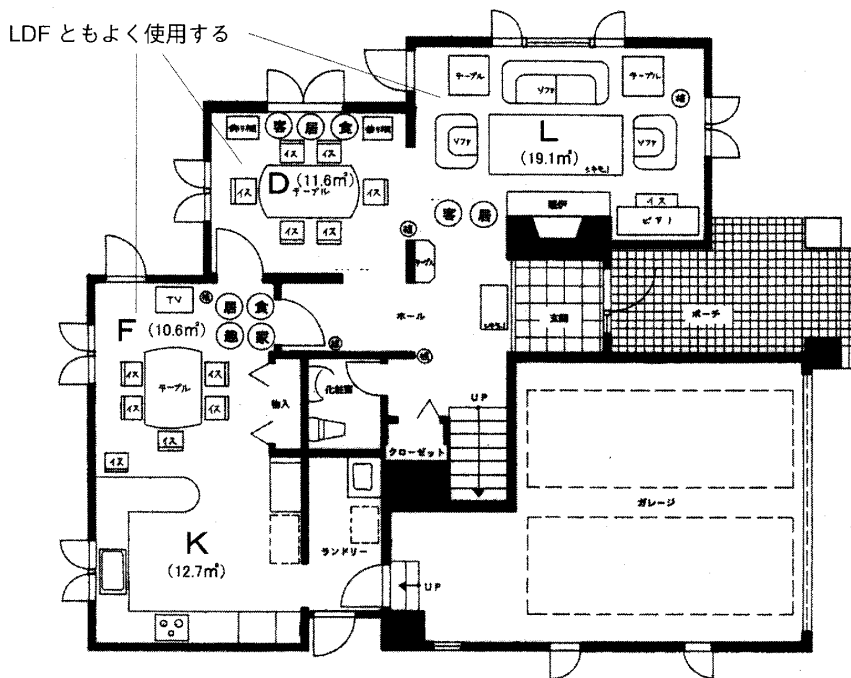
図10 O宅の住まい方事例 (LD/FKタイプ)

55%強で最も多く②タイプに近似しているが、公室全体での1戸当たりの項目数は最も少ない。Lが独立するタイプでは、後述の⑤と同様にLでの行為量が少ない。L, D, Fの3室とも家族的空間であったり、Lが接客的空間、DとF

が共に家族的空間になる。

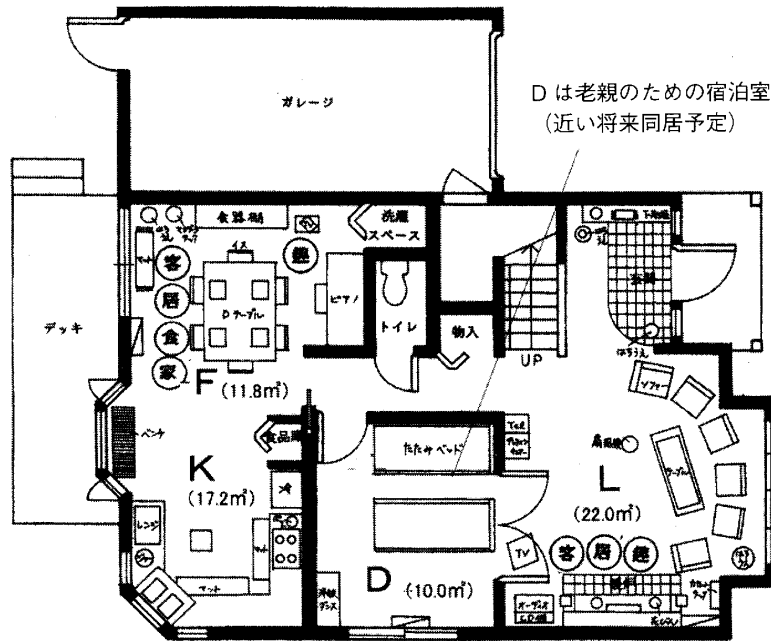
⑤「L/D/F」の住まい方

公室各室の生活行為の割合は、Dが約3割と他のタイプに比べ高い。LとDが完全に分離しているため、Dは、接客的空間であるLにも、



家族構成は世帯主(50歳)会社役員, 妻(48歳), 長女(20歳)大学生, 次女(13歳)中学生

図11 S宅の住まい方事例 (L・D/Fタイプ)



家族構成は世帯主(49歳)会社員, 妻(44歳), 長女(21歳)大学生, 次女(17歳)高校生

図12 N宅の住まい方事例(L/D/Fタイプ)

家族的空間であるFにも属さない独立した室となっている。そのためDは寝室や教室など、公室以外の別用途に使用され、LやFとは異質な空間になる。また、Dが独立することで、公室の連続性が弱まり、公室間の生活行為の移動も減少し、公室での生活がスムーズに展開しなくなる傾向にある。

事例を示す(図12)。N宅では、独立したDは老親用の室として用意され、畳ベッドが2台設置されている。また、Lは接客を中心に使用され、Fでほとんどの生活行為が行われ、行為量はかなり高くなっている。

このように、同じ公室数でも、連結形式によって住まい方に変化が生じる。LDが一体でFと分界していると、LとDは同じ接客的空間で、Fが家族的空間になる。またLDが分節でFと分界していると、Lが接客的空間でDが個人的共有空間、Fが家族的空間というように3つの性格を有する空間になるか、LとDが同じ家族的空間、Fが個人的共有空間になる。Dが独立すると、公室とは異質な空間となり、公室間で

の生活行為の移動が少なくなる。

4. 公室の位置関係と住まい方の関係

公室の位置関係を示すのに基準となるのが方位である。東西南北のなかで特に南面する公室に焦点をあて、位置関係のタイプを分類し、その住まい方をみる。

(1) 位置関係のタイプ分け

南面する公室をみると、南面3室、2室、1室の3パターンに分類できる。南面3室が4戸(7.7%)、2室が31戸(59.6%)、1室が16戸(30.8%)である。南面2室パターンが半数を超える。さらに南面室により細かくタイプが分かれる。Lが南面するのは32戸(61.5%)、Dは32戸(61.5%)、Fは26戸(50.0%)である。LとDが南面する住戸はそれぞれ6割を超えておりLDが南面する傾向が強い。

以上にあげた3パターンを、南面する公室ごとにタイプ分けすると、全部で7タイプに分類できる。

- ①LDF南面タイプ、
- ②LF南面タイプ、

③LD南面タイプ、 ④DF南面タイプ、
 ⑤L南面タイプ、 ⑥F南面タイプ、
 ⑦南面室ナシタイプで、それぞれの戸数は、
 ①が4戸、②が3戸、③が19戸、④が9戸、
 ⑤が6戸、⑥が10戸、⑦が1戸である。LD
 南面タイプが全体の35%強を占めるほかはみ
 な少数で、ばらつきがみられる。

国産住宅においては、南面室はLが優先され
 る傾向にあるが、輸入住宅においては、公室が
 3室あることから、多様な位置関係がうかがえ
 る。

(2) 位置関係からみた住まい方

位置関係のタイプごとに住まい方の特徴をあ
 げる (図13, 表10)。

① LDF南面タイプの住まい方

公室各室の生活行為の割合をみると、DがL
 より行為量が高いのが特徴である。Lが接客
 的空間、あるいは家族的空間か個人的共有
 空間で、Dが接客的空間か家族的空間、F
 が家族的空間である。3室とも南面すると、
 室により行為量が異なるものの、住まい
 方にバリエーションが

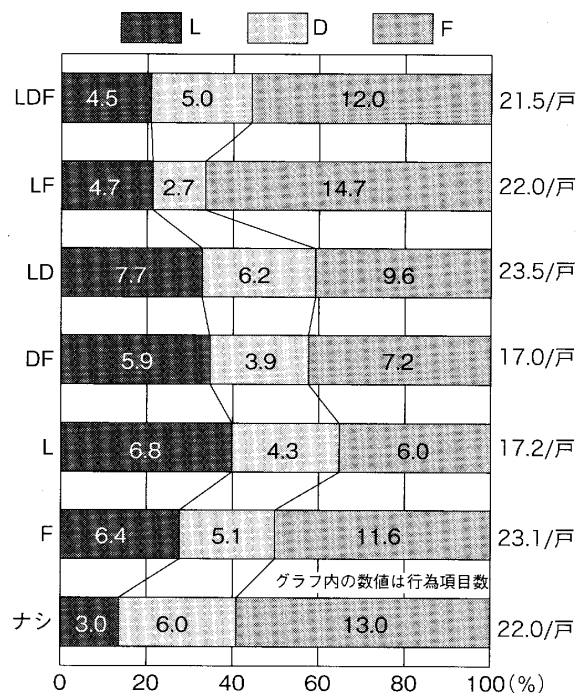


図13 位置関係別公室3室の生活行為割合
 および項目数

あり、3室ともよく利用されている。

② LF南面タイプの住まい方

各室の生活行為の割合は、南面するFが最も
 高い行為量を示すが、同様に南面するLは2割
 強で項目数は低い。さらにDは1割強で行為量
 は極端に少ない。LとDはともに接客的空間で、
 Fは家族的空間である。

①と②のタイプのようにLとFが共に南面す

表10 位置関係別公室3室の使われ方

L					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
LDF南面	4	2	1	1	0
LF南面	3	3	0	0	0
LD南面	19	9	9	1	0
DF南面	9	4	5	0	0
L南面	6	3	3	0	0
F南面	10	4	5	1	0
ナシ	1	1	0	0	0

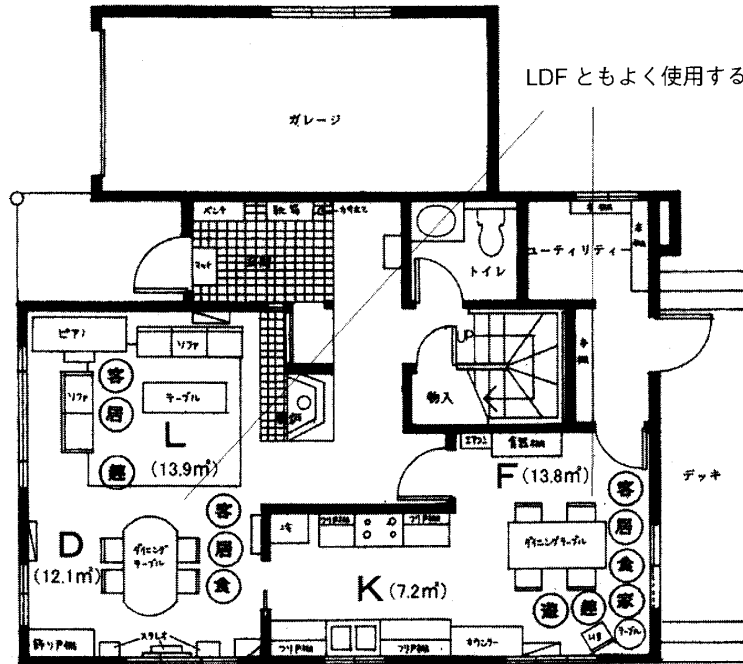
χ^2 p=0.7209

D					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
LDF南面	4	2	2	0	0
LF南面	3	3	0	0	0
LD南面	19	5	8	4	2
DF南面	9	5	4	0	0
L南面	6	0	1	4	1
F南面	10	2	3	4	1
ナシ	1	0	1	0	0

χ^2 p=0.1305

F					
	戸数	接客的空間	家族的空間	個人的共有空間	私室
LDF南面	4	0	4	0	0
LF南面	3	0	3	0	0
LD南面	19	0	16	3	0
DF南面	9	0	6	3	0
L南面	6	0	6	0	0
F南面	10	0	9	1	0
ナシ	1	0	1	0	0

χ^2 p=0.4912



家族構成は世帯主(37歳)会社員, 妻(37歳), 長男(11歳)小学生, 長女(9歳)小学生

図 14 O宅の住まい方事例 (LD 南面タイプ)

ると、生活行為は特にFに集中する傾向が認められる。

③ LD南面タイプの住まい方

各室の生活行為の割合をみると、3室とも均等に使用されている。Fは元々家族的空間としての位置付けが高く行為量が多いが、LとDが南面することにより、Fでの生活行為がLやDにも移動する結果であろう。公室全体の行為項目数は、他のタイプと比べ最も高い数値である。LとDが接客の空間でFが家族的空間であったり、L、D、Fの3室とも家族的空間であったり、またLとDが家族的空間でFが個人的共有空間であったり、Dが私室であったりと、住まい方にバリエーションがみられる。

事例を示す(図14)。O宅では、接客、だんらんなどの生活行為は、L、D、Fすべての室で行われ、客や家族員によって使い分けている。また、生活行為の移動性が高い。

④ DF南面タイプの住まい方

各室の生活行為の割合をみると、南面しない

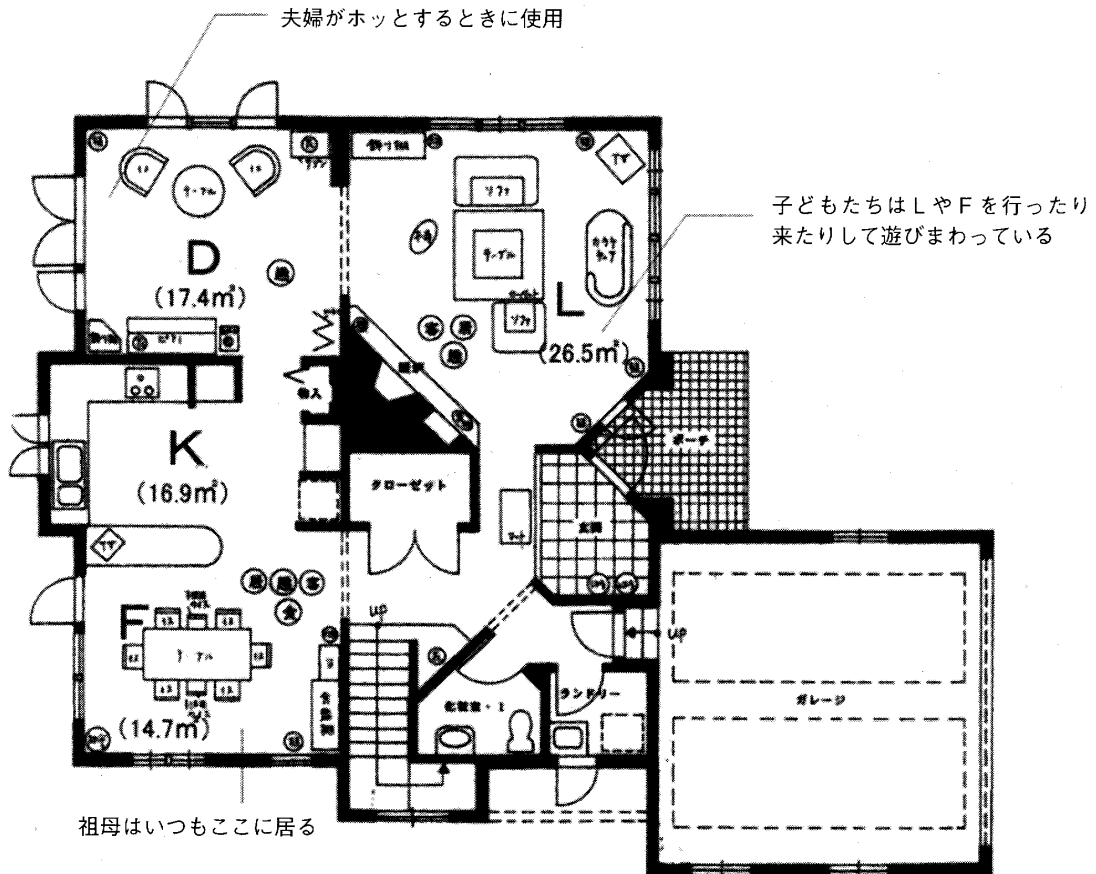
Lが比較的高い。また、公室全体の1戸当たりの項目数は他のタイプの中で最も低い。このタイプはF面積が比較的に狭く、Fの行為量が少なくなり、LDが生活の中心になる。Lが家族的空間でDが接客の空間、Fが家族的空間になる傾向が強い。よってここでは位置関係の影響はみられず、それよりも公室面積によって住まい方の特徴が現れたことになる。

⑤ L南面タイプの住まい方

公室各室の生活行為の割合は、Lがかなり高く、逆にFは低い。これは、通常Fで行われる家族の生活行為が、南面するLに移動するためである。移動が多くなるため、3室ともよく使用される。Lは接客の空間、Dは個人的共有空間、Fは家族的空間になる傾向がみられる。なかでもDが個人的共有空間になる割合が6割強と高い。

⑥ F南面タイプの住まい方

各室の生活行為の割合をみると、Fが高い率を示し、公室全体の1戸当たりの項目数はかな



家族構成は世帯主(38歳)自営業、妻(37歳)、長男(7歳)小学生、長女(4歳)幼稚園、次女(2歳)、祖母(68歳)

図 15 K宅の住まい方事例 (F南面タイプ)

り多い。南面するFが家族的空間として生活の中心となっている。Lは接客的空間や家族的空間、Dは個人的共有空間、家族的空間、接客的空間となり、特にDは多様な使われ方がされているのが特徴である。

事例を示す(図15)。K宅では、南面するFで生活行為が全般的に行われ、主要な生活の場になっている。Lは接客やだんらんなどが行われている。また、Dは小さなテーブルが置かれていて、簡単な接客や趣味が行われることがあるが、LやFと比較するとあまり使われていない。したがって、Fが生活の中心になっている。

以上のように、位置関係によっても住まい方が異なってくる。南面する室は居住性が高く行為量が多くなる傾向にあることは、それぞれのタイプの住まい方をみても明らかである。Fは元々行為量が多い室なので、南面にかかわらず

使用頻度は高い。逆に、LやDが南面すると、そこでの行為量も増え、結果的にはLDFとも使用頻度が高くなる。しかし、DF南面タイプのように、住まい方の特徴が南面する室とは関係しない場合もみられる。このタイプの場合、位置関係よりも公室面積の大きさによって住まい方が左右されている。このように、位置関係が絶対的に住まい方に影響を及ぼすわけではない。

5. まとめ

輸入住宅における公室の住まい方の傾向を公室構成の要素である面積配分や連結形式、位置関係からまとめると、次のようになる。

① 面積配分から見ると、Fの住まい方に有意差があらわれることが明らかになった。Fは元々Kに直結しているため、家族的空間になる

が、F面積が狭いと、家族的機能がLやDに移行する。したがって、F面積の大小は公室全体の住まい方に影響を与える。F面積が小さいとき、Fは家事室などの個人的共有空間となり、LやDは家族的空間になる。F面積が大きくなると、Fは家族的空間（食事が主）になり、Dは家族的空間でLは接客的空间、またはDは個人的共有空間でLは家族的空間、そしてDは接客的空间でLは家族的空間とさまざまである。さらにF面積が大きくなると、Fは家族的空間（だんらんと食事が主）になり、Dが個人的共有空間でLが接客的空间、またはLとDが接客的空间になる。

ちなみに、L面積に関しては、12帖を境に接客的空间から家族的空間にLの住まい方が変化する。Dに関しては、面積と関わりなくDの住まい方はバリエーションに富んでいる。F面積に関しては、6帖を境に個人的共有空間から家族的空間へFの住まい方が変化する。その他、Kの面積が8帖を超えると、十分な収納スペースが確保され、結果的には公室が整然とし、室内景観の質が高められる。さらにLDとFKの面積比率に関しては、F面積によって住まい方がかなり異なることが判った。F面積が大きくなるほど、そこで行われる生活行為が増え、Lが接客的空间になりやすい。つまり、前述と同様の傾向を示す。そして公室面積に関しては、50㎡を境に家族的空間と接客的空间のみに加えて個人的共有空間も包含する住まい方に変化する。また、公室面積を拡大するにも限度があり、大きすぎると住みこなしができない。公室面積60㎡以下で、L、D、Fの3室が同程度の面積のとき、3室は均等に使用され、無駄な空間ができない。

② 連結形式や位置関係からみると、Dの住まい方に有意差がみられることが明らかになった。LとFの中間に位置するDは、連結形式により

Lの生活行為に同化したり分化したり、あるいはFの生活行為に連動したりする。DはLやFの住まい方に影響を受ける。LDF3室が一体の場合は、LやFの生活行為に左右されるというよりは両室の中間的な役割を果たし、Dは個人的共有空間になる。LD2室が一体になると、Lに導かれてDは接客的空间になる。そしてLDが分節するとLとは異なり、あるいはDFが一体になるとFに導かれて、Dは家族的空間になる。さらにDが独立するとLDとは異なる私室になる傾向を示す。また、「L・D/F」で連結する場合、DがLとFの仲介の役割を果たし、3室の生活行為の移動が円滑になり、公室間の連動性が高まり、LDFとも有効に活用される。

さらに、南面する室は居住性が高くなり、常時使用される家族的空間になる傾向にあるため、位置関係によっても住まい方が異なってくる。なかでもDの住まい方が変わる。LDFの3室が、あるいはDFの2室が南面するとLやFの生活行為に左右されて、Dは使用頻度がそれなりの接客的空间か家族的空間になる。LDが南面するとDは使用頻度の高い家族的空間に、LFが南面するとDは使用頻度の少ない接客的空间になる。LだけあるいはFだけ南面すると、その室に生活行為が集中するためDは余裕ある個人的共有空間になる。公室が3室あると、必ずしもFを南面させる必要はなく、ある程度方位から解放されるといえよう。

以上をまとめると、「LDK+F」のプランで公室3室が有効に活用されるのは、面積が60㎡以下で、Fが6帖を超え、3室の面積が近似し、LとDが分節し、どちらかといえばLとDが南面するタイプである。このような条件が整うと、3室が自立した空間的性格を有し、接客本位・家族重視・個人優先などさまざまな家族のライフスタイルに対応することが可能になる。

注

- 1) 参考文献4) を参照
- 2) 建設省建設経済局調査情報課監修「建築統計年報平成12年度版」財団法人建設物価調査会発行、2000
- 3) 建設省住宅局住宅生産課監修「ゆとりの住まい」ケイブン出版、1990
- 4) 筆者が1994～98年にかけて調査した国産住宅133戸を対象とする。
- 5) 参考文献5) を参照
- 6) 注1) と同様。
- 7) 「ENCYCLOPEDIA OF HOME DESIGNS, HOME PLANNERS, INC. (1993)」の中から123戸を対象とする。

参考文献

- 1) 鈴木成文・初見学「住居における公室の計画に関する研究」『(財)新住宅普及会住宅建築研究所報No.8』, 1981
- 2) 住田昌二・竹田喜美子他「一戸建住宅平面の類型化と標準化に関する調査研究」財団法人大阪

住宅センター、1985

- 3) 山本理顕「住居論」住まいの図書館出版局、1993
- 4) 竹田喜美子・番場美恵子「輸入住宅における平面構成の特徴」『都市住宅学会第24号研究論文』, 1998.12
- 5) 竹田喜美子・番場美恵子「輸入住宅における住まい方に関する研究その1 公室空間における住まい方の特徴」『日本建築学会計画系論文集第524号』, 1999.10
- 6) 竹田喜美子・番場美恵子「輸入住宅における住まい方に関する研究その2 公室空間における起居様式の傾向」『日本建築学会計画系論文集第542号』, 2001.4
- 7) 番場美恵子・竹田喜美子「輸入住宅における住まい方の研究その6 公室の面積配分と住まい方の関係」『日本建築学会関東支部研究選集4』, 1995.10
- 8) 番場美恵子・竹田喜美子「輸入住宅における住まい方の研究その7 公室の連結形式と住まい方の関係」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 1995.8

受理年月日 平成15年9月30日

審査終了日 平成15年11月6日